

ACTIVITIES

第5期 編集講座「基礎から学ぶ編集教室」：第1回

5 20

5月20日より第5期の編集講座が始まりました。第1回目は、2009年12月に発売以来、累計80万部を突破した人気のビジネス書『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』(岩崎夏海著・ダイヤモンド社・1680円)の担当編集者、加藤貞顕さんを講師に迎え、「売れる企画」のポイントをお話いただきました。

「マーケットの大きさを見定める」「書籍が並ぶ棚を見て、目立つデザインを考える」「インパクトのあるタイトルを考える」など、売れる本づくりの過程や考え方が明確にわかる、発見の多い編集講座となりました。



7月以降の予定は以下の通りです。

第3回(7月22日)

取材の仕方、文章の書き方

準備から、質問の仕方、わかりやすい文章の条件など

講師 石塚 由紀夫氏(日本経済新聞社 生活情報部 編集委員)

第4回(9月)

いい原稿、わるい原稿。

原稿整理でここをチェック

原稿の確認、判断から、疑問点のチェック

用字用語の統一、タイトル、小見出しのつけ方など

講師 未定

第5回(10月)

電子書籍の流れとビジネス

(拡大編集セミナーと合同開催)

講師 未定

※この回は開講時間が異なります。詳細が決まり次第掲載いたします。

AJECホームページリニューアル

6 25

AJECのホームページが6月25日にリニューアルオープン。トップページに会員各社の広告バナーの掲載や出版界に関する著名人のインタビューを掲載するなど、編集制作に関わる人々のポータルサイトとしての機能がますます充実しました。

<http://www.ajec.or.jp/> にアクセスを!



INFORMATION

理事の管掌部門変更(2010年6月末現在、敬称略)

第28期通常総会において改選された新理事とその担務変更は以下の通りです。

理事長	教育委員長	細江 弘司(オフィス201)
副理事長	教材部会長/教育委員会担当	山本 肇圀(シナップス)
事務局長	組織委員長/一般書部会長	平田 顕(キャデック)
理事	広報委員長/デジタル部会長	鈴木 あきら(オフィス・サンタ)
理事	経営委員長/企業出版部会長	小原 好春(アイフィス)
理事	組織委員・広報委員担当	西村 典博(トライアングル)
監事		小椋山 範男(プレーンプール)
監事		坂井 一之(風讀社)

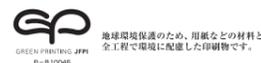
事務局移転のお知らせ

2010年6月1日より事務局の住所及び電話番号が変更になりました。

(新住所)

〒101-0061
東京都千代田区三崎町3-2-10
寺西ビル2F

TEL 03-5226-0036
FAX 03-5226-0037



EDITORIAL MAGIC

2010.06.21 Vol.01



巻頭特別インタビュー

民主党議員 文部科学副大臣 鈴木 寛氏

電子教科書の時代

編集の現場探訪 vol.1 [有限会社 木杵舎]

「精緻さと専門性で
多くのヒット作を」
代表取締役 田中 信幸

編集者は私です

『ぴあクラシック』ぴあ発行
『カラー図解 楽器の歴史』河出書房新社刊

AJEC
<http://www.ajec.or.jp/>

電子教科書の時代

生徒一人ひとりのための
進化し続ける
「クラウドコンピューティング教材」

INTERVIEW
巻頭特別インタビュー

歴史的な政権交代から9カ月あまり。学力低下、ゆとり教育批判、
教員免許更新制、教科書問題……と多くの問題を抱える日本の教育制度は、
民主党政権によってどのような変化を遂げていくのか。
それにともない、学習指導の骨格である教科書、
副教材はどうあるべきなのか。
教育改革の鍵を握る民主党参議院議員で
文部科学副大臣の鈴木寛氏に聞く。

民主党議員 文部科学副大臣
鈴木 寛氏
KAN SUZUKI

コンクリートから子どもたちへ

——まず、これからの教材についてお話をお伺いする前に、民主党政権がどのような教育改革をお考えなのかお聞かせください。

鈴木 昨年、鳩山前首相が所信表明演説で示した「コンクリートから人へ」という考え方に尽きるとしています。「コンクリートから人へ」というのは大量生産、大量消費といった物質文明偏重主義の社会を終わらせるということ。

これからは物質的な豊かさが人々の平和と幸福を保障するのではなく、人と人、人と自然の間における深みのあるコミュニケーションや文化にこそ人々の平和と幸福をつくり出す根源があるということですね。それを具体的な教育政策で言えば、教育環境では教員の質と数の充実、教育内容としてはコミュニケーション力の育成ということになります。

外国人が増え続けている我々の社会では、コミュニケーション力の必要性は高まるばかりで、それは外国人との共生だけではなく、相互扶助を基本とした地域社会づくりや絆づくり、障害のある人を受け入れる能力の育成のためにも必要不可欠なものです。

——コミュニケーション力の育成は、今日

本の子どもたちに足りないと言われている「自ら考え、解決する力」の育成の一つとも言えますか？

鈴木 大量生産、大量消費といった物質文明偏重主義の社会を支えた教育は、「工場型」の教育です。これは「暗記力」と「反復力」を重視する詰め込み教育でした。子どもたちは家族や教員から「これを勉強しろ」と、トップダウンの教育をされてきたわけです。だから、自分をどう表現していいかわからない。その弊害が鬱や引きこもりなどの社会問題を生み出した。

私はこれまでの「工場型」の教育から「劇団型」の教育へ転換しなければならないと思います。「劇団型」の教育ではスポットライトを浴びる役者もそうでないスタッフもそれぞれ素晴らしく、大事な役割だということを教えていく。特に目立たない縁の下の力持ちであるスタッフワーク、役者に照明を当てるといったような仕事の意義、意味、やりがいを教える。

コミュニケーション力育成の具体的な手法としては、異文化コミュニケーション、異言語コミュニケーション、スポーツ活動はもとより、いろいろな人物を演じられ、かつ、グループで協働することが求められる演劇といった方法が考えられると思います。また、ボランティアなどの地域のコ

ミュニティ活動も有効だと思います。

コミュニケーション力の育成を通して、子どもたちにもコラボレーションのなかで役割を担い、みんなと何かを一緒につくりだすことは楽しいということを知ってほしいですし、そうした価値観のもとで学べる学校を増やしていかなければならないと思っています。

「ゆとり教育」に欠けていたこと

——詰め込み型の教育を見直すために「ゆとり教育」が生まれたのだと思いますが、「ゆとり教育」の問題点は一体どこにあるのでしょうか。

鈴木 「ゆとり教育」の定義が非常に曖昧なので、私は「ゆとり教育はけしからん」などといった批判は不毛だと思っています。一人ひとりの子どもの多様な能力を伸ばそうということが「ゆとり教育」であるならば、私は賛成です。

しかし、自民政権下では、そのための準備に不十分な点がいっぱいありました。教員数は増やしていませんし、教員の質についても現場まかせにしました。それでは、教員の手抜きにつながる「ゆるみ教育」と批判されても仕方ありません。

子どもの学びに対する「個別化・個別

対応」を行うためには教員の質と数を上げることや一人ひとりの子どもにあった教材などのツールを整えなければいけないのに、それに対して予算的にも時間的にも追いついていない。そこに「ゆとり教育」が批判される原因があるのです。

決して、「ゆとり教育」の概念が問題なわけではありません。

新しい学校「コミュニティ・スクール」

——地域の方々が学校運営に参画することで注目されている「コミュニティ・スクール^{*1}」も、そうした「個別化・個別対応」教育の一環ということになりますか？

鈴木 そうですね。コミュニティ・スクールは保護者や地域の皆さんの声を学校運営に直接反映させ、保護者・地域・学校・教育委員会が一体となってより良い学校をつくり上げていくことを目指すものです。

コミュニティ・スクールのコミュニティは「地域」に限定せず、「共同体」のようなイメージです。学校、地域、自治体、国が子どもを包み込む「学びのコミュニティ」なんです。

現在コミュニティ・スクール一校で約150～250人のボランティアがいますが、さまざまな生徒たちが課題や問題乗り越えていくために、こうした人たちと関わりあえることを獲得していく場としてのコミュニティという意味なんです。

コミュニティ・スクールでは教師の役割も変わってきます。今までのようにトップダウンで「教える」というより、どのように生徒一人ひとりの「学び」をプロデュースしていくか。「ティーチャー」としてではなく「エドューケーター^{*2}」としての力が必要になってきます。

デジタル化で日々進化する新しい教材

——コミュニティ・スクールで使用する教材は、従来のものとは大きく違ってきそうですね。

KAN SUZUKI PROFILE

1964年兵庫県生まれ。東京大学卒業後、1986年通商産業省に入省し、情報政策などに関わった後、1999年に慶應義塾大学環境情報学部助教授へ。教育の世界で活躍した後、2001年に民主党公認で東京選挙区から立候補し、当選。さまざまなNPOの活動へ参加し、現在の政界では教育政策についての第一人者として評価されている。

デジタル化された教材を使って、生徒一人ひとりにカスタマイズしていきたいと考えています。

鈴木 コミュニケーション教育、コミュニティ・スクールの運営にIT活用が有効であるように、これからは教科書や教材もどんどんデジタル化していきたいと思っています。

私たち民主党の考えである「教育」から「学習」へという考えから、「学びのメディア」をつくりたいのです。直接的なコミュニケーション、相互の情報交換を可能にして子どもたちへの「個別対応」ができる教育の実現です。教材をつくっていく環境も劇的に変わっていくでしょう。

デジタル化された教材を使って、生徒一人ひとりにコンポーネントを組み合わせ、生徒ごとにカスタマイズできると考えています。それは、ボリュームだけではなくて、使いやすさ、学習の仕方も一人ひとり違って、作り手と使い手でインタラクティブに進化していく新しい教材です。

具体的には、動画やワークシートを盛り込んだり、反復学習もできるようにし

たりといろいろなやり方があります。学び方も、子どもによって、耳で聴いて覚えるのが得意な子もいれば、目で覚えるのが得意な子もいる。それぞれ、得意な覚え方で学んでいくんです。だから、教科によっても、習熟度によっても、かなり幅のある多様な教材になると思います。

例えば、社会科の場合、レベルの高い子には、教科書に載っているA説だけでなく、教材にはB説、C説、D説……と多様な説があることを紹介できたりと、さまざまなチャレンジができると思います。

クリックをするだけで、その子だけの教材になる。そんなツールを現場で使えるようにしていきたい。

——デジタル化は指導する側にとっても、大きな変化になりそうですね。

鈴木 劇的な変化です。まず、生徒一人ひとりの学習履歴の管理や学習到達度が把握できます。それも担任の教師だけではなくて、「学びのコミュニティ」で共有

できるんです。

例えば、担任の先生が作文の添削をするのに、免許を持った教員と地域のボランティアの人に、「この子の作文の感想を願ひできませんか」といってコラボレーションできる。そのほかの教科でも、担任と免許を持った教員とボランティアの軸を中心とした指導方法ができるようになります。

こうすることで、いつでも、どこでも、必要に応じて、生徒一人ひとりの学習状況が把握できるようになります。

さらに言えば、教材や教科書のデータをデジタル化してクラウドコンピューティング^{*3}を活用すれば、それが全国の教育現場でただちに利用可能になる。さらに、クラウドを使えばいつでもどこでも学力調査ができるようになるんです。

——教材のデジタル化は、今まで教材を制作してきた企業側も、頭の切り替えが必要になってきますね。



「コンクリートから子どもたちへ」
鈴木 寛(著)、寺脇 研(著)
講談社刊

民主党政権で子どもたちを取り巻く教育はどのように変わっていくのか。寺脇研氏との対論で、今後の日本の教育政策を探る。

従来の紙ベースの教材では、この変化にはついていけません。それを危機だと思うか、チャンスととらえるか。

鈴木 紙ベースの教材だけでは、この変化にはついていけません。それを危機だと思うか、チャンスととらえるか。

今まで、私はさまざまな業界にITが入っていくのを経験していますが、なかなか、イメージができないために脅威を感じる人が多いのが実際です。でも、私は未来を創る子どもたちの代弁者の立場

です。その立場から言わせてもらおうと、もう、新しい時代を創る側に頭を切り替えてほしい。

教材をつくる業界内でも、再編があるかもしれませんが、合従連衡して、日本の新しい教育のために、今まで以上に知恵を出し合い、新しい教材をつくってほしいと思います。

INTERVIEW KAN SUZUKI

*1 コミュニティ・スクール

2004年9月に導入された新しい公立学校運営の仕組み。保護者、地域住民からなる学校運営協議会が、教育委員会、校長と責任を分かち合いながら、学校運営に携わっていくことで、地域に開かれ、地域に支えられる学校づくりを実現することを目指すもの。

*2 エドューケーター

「educate」の語源は、「外へ」を意味する接頭語(e)と「導く」を意味する語(ducere)から成るといわれている。つまり「エドューケーター(ecucator)」とは、「子どもの能力や可能性を導き出す教育者」のことをいう。

*3 クラウドコンピューティング

クラウド(雲)はネットワーク(主にインターネット)を指す。ユーザーがインターネット上＝クラウドの中のサービスを、その所在や内部構造を意識することなく利用できる環境を「クラウドコンピューティング」という。



編集の現場探訪 Vol.1

有限会社木杵舎 (もくようしゃ)

1984年設立。「音楽モノ、楽譜、データ処理に強い」を合い言葉に、企画・編集・制作の一貫作業を武器にする。その他一般書籍、雑誌の企画・編集制作、CDの企画・制作まで幅広く対応。DTPにも定評がある。



精緻さと専門性で多くのヒット作を

木杵舎 代表取締役 田中 信幸

企画から編集・制作まで一貫して対応

弊社は長年にわたり音楽雑誌と書籍をメインに企画から編集制作をしており、最近では一般書籍、雑誌の企画にも力を入れているところだ。

もともとはラジオ雑誌「週刊FM」の番組欄の編集制作を請け負ったことから始まったわけですが、番組欄という非常に正確さと細やかさが求められます。そのため、細かいデータ処理をスピード感をもって進めるのが得意です。

今でも、そのときに培ったノウハウは音楽情報誌のコンサートガイドとか、イベントカレンダーなどの編集制作をする際に生きています。

同時に弊社は設立時期の早い段階でDTPを取り入れ、1980年代には縦組みをきれいに組版できる画期的なソフトEDIANを導入しました。現在はEDIAN WINGとなり、企画から編集制作の作業

を一貫してできるのが我が社の強みでもあります。

これによって、編集作業とDTPによる制作が同時に進行できるので、スムーズな進行とスピード感のある納品が可能になり、多くの取引先のご期待に添えるよう、社員が丸となって作業にあたっております。

音楽の楽しみ方を伝えていきたい

編集とDTPの両輪のおかげで、企画から編集制作の作業を一貫して請け負うことも可能となり、最近ではヒット作も増え続けています。

私たちが得意とする「音楽」をテーマに企画を考えるにあたって、一番大切にしていることは「音楽を楽しく伝えていく」ということです。雑学のような感じで、わかりやすく、親しみやすいものとして伝えていきたい。専門的なものは、ほか

たちは、素人の代表的な立場で、難しいものをつくらないことを心がけています。

一番の代表作は『さわりで覚えるクラシック』(中経出版)で、これは、17万部の大ヒットとなりました。クラシック関係の書籍は1万部を超えれば大成功と言われてはいますが、それを優に超えたわけ。この本はシリーズ化されて、シリーズ合計50万部となりました。

これを超えるヒット作を出すことが会社の課題でもあります。もっと、大きな視点で考えると、音楽に興味のない人を振り向かせる企画で、音楽を楽しむ裾野を広げていきたい。

本屋で音楽コーナーの書棚は年々縮小されていますが、本来、人の人生に音楽は欠かせないはずですし、人の心に変化を促すものがあります。音楽を通じて読者が癒されたり、元気が出るような企画を考えるのが私たちの仕事だと思っています。

編集者は私です

木杵舎の社員が編集した書籍・雑誌を紹介します。



根本 由佳
YUKA NEMOTO

2003年入社。早稲田大学卒。木杵舎を「根が真面目」と評する。趣味は料理。最近の得意料理は実家でとれる筍を使っの筍ご飯。

読者のダイレクトな反応がうれしい

昨年11月からびあが発行するフリーペーパー「びあクラシック」の担当になりました。クラシックのコンサートやイベント、CDなどを紹介する冊子です。グラビアが多く、デザイン性も高い読み応えのある情報誌だと自負しています。配布場所はレコード店や、チケットびあのカウンターです。配布日には気になって、思わず見に行ってしまうですね(笑)。

「びあクラシック」は広告収入で成り立っているのびあとクライアント両方の意向をくみ取って記事にすることを心がけています。ですが、やはり読者に一番喜んでいただきたいので、その3者にとってプラスになる着地点を探すのが、最大の仕事です。

入稿後の会議では、反省の意味も含めて読者アンケートに目を通して見ます。最近、印象に残っているのは「この演奏者の特集を待っていました」とか「コンサート情報が役に立った」「もっと地方公演の情報を増やしてほしい」という声です。

季刊誌なので、概ね毎回のテーマは決まっ

ていますが、こうした読者からの声は励みになります。誌面作りで大いに役立てていきたいと思っています。

読者の反応をダイレクトに感じられるのが、この仕事の醍醐味です。楽しみに待ってくださっている読者のためにも、いい企画、編集で広告収入を増やして、継続していけるよう貢献したいと思っています。

「びあクラシック」 発行 びあ



びあが発行するクラシックファン向けのフリーペーパー。チケットびあカウンターのほか、コンサートホールやタワーレコード、HMVなどの主要レコード店にて配布。

YUKA NEMOTO



石田 多鶴子
TAZUKO ISHIDA

2002年入社。東洋大学卒。「木杵舎は、いい意味で地味。居心地が非常にいい会社」。中学、高校と吹奏楽部に属し、当時の女子としては珍しい金管楽器の中で最も大きいチューバを務めた。

著者のこだわりが詰まった一冊

東京芸大の講師、佐伯茂樹さんと何回かお仕事させていただき、楽器同士のつながりや進化の仕方、歴史、作曲当時の楽器がどのようなものだったかということに興味をわき、企画をしました。

一番配慮したのは、読者に楽器の仕組み、構造をわかってもらうために、どの角度、どの部分を見せるのがベストなのかという点です。著者の佐伯さんがピカピカの新品ではなく、本物にしか出せない独特の質感を出したいということで、写真はほぼすべて撮り下ろし。芸大の楽器を借りたり、博物館に全面協力してもらって、それはもう、強行スケジュールでした。写真は大体200カットくらいあるのですが、楽器の内側がどうなっているかを解説するために、ホルンを切断するなど、著者の佐伯さんのこだわりが詰まっています。

ページデザインも大変でした。写真はすべてキリヌキだし、一つひとつ形の違う楽器をうまく見せるためレイアウトも全ページ異なります。制作スタッフに大変な苦勞をかけて

しました。でも、おかげで見応えのある誌面に仕上がったと思います。

弊社は音楽の出版社との付き合いが一番長いのですが、今後は一般書を扱っている出版社から、入門者から上級者まで楽しめる音楽書を出したいです。そのために、プレゼン力をもっと磨きたいと思っています。

「カラー図解 楽器の歴史」 佐伯茂樹著 / 河出書房新社刊



ヴァイオリン、フルート、ホルン……楽器の進化をひも解くカラー図鑑。普段目にすることのない貴重な楽器も多数収録。ビジュアルも知識も大充実の永久保存版。

TAZUKO ISHIDA